Dryden の *Aureng-Zebe*

木　村　俊　夫

1) *Conquest of Granada* (1670) は Dryden のみならず所謂 heroic play の一つの頂點を示すものとして重要な作品である。併し其所からの下降は早かつた。以後の Dryden は次の *Marriage a la Mode* (1672) に於てその才能の一面をみせはしたが，凡そ3年間と云ふものは不振時代である。1675年に於ける *Aureng-Zebe* の上演はその不振の挽回となつたものであり，つゞいて1677年には彼は *All for Love* を制作するに至つたのである。

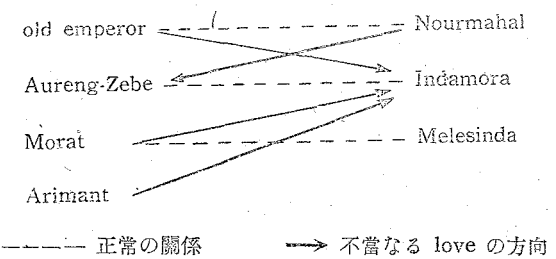
此の *Aureng-Zebe* はそれ自體の佳作であると云ふことの他に，劇作家 Dryden の一の轉機を劃するものとして極めて重要なのである。John, Earl of Malgrave に捧げられた此の劇の dedication には

「後程陛下よりは此の劇が私の全ての悲劇の内で一番すぐれて居ると確證していただきました」

とあるが，本稿は主として轉機としてみた *Aureng-Zebe* の解明である。

2) Agra 城内にある老帝 (Shah Jehan) 崩御の虚報一度び傳はるや，遠征中の末子 Morat は王位を奪取せんものと急ぎ城内に歸つて來る。その異母兄にあたる Aureng-Zebe は父の身を案じて Morat に先んじて入城する。老帝は Anreng-Zebe が城内に殘して置いた Indamora に邪戀をしかけて居たので，rival にあたる Aureng-Zebe を自分にとつて一番の孝子と知りつゝ，此を達ざけ様とする。節操の固い Indamora は王の口止めにも拘らず，留守中の出來事を Aureng-Zebe に打ちあけ様とするので Arimant（彼も亦 Indamora に戀情を抱いて居るが，却つてその爲に終始 Indamara の手足となつて動き，最後には Aureng-Zede の名を名乘つて戰死する）に依つて監禁される。孝順の Aureng-Zebe ではあつ

たが，王より Indamora のことで難題をうけはねつけるので，王は末子 Morat を起用して，Aureng-Zebe を遠ざける。Aureng-Zebe は Indamora に關する限り斷じて王にゆづらぬので，此又異母 Nourmahal の下に監禁の憂目をみる。Morat は留守に殘して行つた自分の女 Melesinda を省みやうとはせず，此又 Indamora に心ひかれる。勿論の事，彼女は此をうけつけない。Morat は兄を亡き者にせんとして居たが，Indamora の懇願に依りしばしの助命を約する。Aureng-Zebe も監禁中に Nourmahal より云ひよられるが手きびしくはねつけ，將に毒杯をあふらんとするとき，助命の事が知らされる。Morat の暴虐止るところを知らず，母を罵倒し，老帝をないがしろにし，背倫ぶりを發揮するので，老帝はじめて自分の非を悟り，遂に Aureng-Zebe の活躍となつて，亂戰の後，Morat 死に，Melesinda 後を追ひ，Nourmahal も狂亂のうちに死に，Indamora と Aureng-Zede は結ばれる。主な人物の關係を圖示すれば次の如くである。



3) 此の劇の內容に於ける變化をみる前にその詩形の變化について一言して置かう。內容の變化は當然詩形の變化を伴はざるを得なかつたのであり，そして多くの史家に依る此の劇の研究に於て先づ指摘せられて居るのが此の詩形の變化なのである。prologue から有名な三行を引用しやう。

> But he has now another taste of wit,
> And, to confess a truth, though out of time,
> Grows weary of his long loved Mistress, Rhyme

heroic couplet が blank verse の中に挿入せられると云ふ事ならば，すでに Elizabeth 朝の劇の中に前例はある。併し heroic play の特徴とした所は全篇此を以つて對話を埋める事にある。heroic couplet が劇の基調になるに至つた歴史とか，此を採用すべきか否かについての Dryden, Howard 等の論爭については，此所ではふれない事にする。

Dryden は斯く Rhyme に疲れたとは云ふものの，此の劇に於ては未だに heroic couplet と訣別はしなかつた。唯 rhythm や pause の位置が不規則になり，文の區切が line から line へ，一 couplet の終りから次の couplet の始めへと流れて行く所謂 enjambement の傾向が顯著にみられるに至つたのである。Chaucer, Spenser, Marlowe 等に依つて用ひられた此の詩形は未だに何のこだはりもなく run on して居る。併し漸く Ben Jonson あたりから，Waller, Dryden を經て Pope に於て完成せられた此の詩形は已に均勢のとれた，規則正しい pause を持つた endstop verse となつて居た。完成せられたと云ふ事は，形式がそれ自らに一番適した內容を得たと云ふ事なのでもあるが，斯くみれば heroic couplet は narrative な，contemplative な，philosophicな，descriptive な，わけても satirical な內容に一番よく適合した詩形であると云ふことが出來るであらう。併し，此を以つて劇全體を埋めると云ふ場合はどうであるか。measure と rhyme の一致を害ふ事なしに對話を運んで行つて，果して「對話」は成立するか。又挿入すると云ふのならば別であるが，全篇担々と此を以つて貫いて行つて，果してよく最後まで觀衆をつなぎ得るか等の問題が起るであらう。敍事詩に於てならば此は許されるであらう。又所謂 heroic play なるものは劇であると共に，極めて敍事詩的性質の多いものではあつたが，併しそれが兎に角劇の形式を具へたものである以上，その演劇性を無視する事は出來なかつた。Dryden の論旨がどうであつたらう共，實際に於ては必ずしも彼は此の演劇性を無視しては居ない。*Conquest of Granda* の一例にみても

Almanzor　I love you better, with more zeal than he,
Almahide　This day
　　Igave my faith to him, he his to me.

(Part I. III. 1)

と云ふ樣な對話のうけわたしは瀕繁にあるし,

Almanzor　Love has undone me; I am grown so poor,
　　I sadly view the ground I had before,
　　But want a stock, and ne'er can build it more.

(Part I. V. 2)

と云ふ樣な triplet が間々挿入せられもした。そへて又樣々な詩形の songs (Part I. III. 1; Part I. IV. 2; Part II. IV. 3) が絕妙の音樂を伴つて, heroic conplet を中斷し, 一つの relief の役割を果して居る事等があげられるであらう。併し乍らあの Almanzor の超人的な gest はあくまで heroic couplet を基調に展開されて居るのであるし, Almanzor 自身の性格も此の詩形から生れたものと云ふ事が出來るのである。

No man has more contempt than I of breath
But whense hast thou the right to give me death?
Obeyed as sovereign by thy subjects be,
But know, that I alone am king of me,
I am as free as nature first made man,
Ere the base laws of servitude began,
When wild in woods the noble savage ran.

(Part I. I. 1)

を初めとして全篇をつらぬく得意の sententious な語調 rhodomontade, ひいては劇全體の mechanical な機構も實は heroic couplet の生んだものなのであつた。blank verse にのつて展開する Tamburlaine の野望と此の Almanzor をみてみれば, よくその相違をうかがふ事が出來るであらう。それと同時にその mechanical な構成の背後にひそむ馬鹿々々しさをも生み出したのであつた。ところが, *Aureng-Zebe* に於ては上述のやうな songs がなくなつたと云ふこと等の他に, 此の基調自體に上述のやう

な變化をみせて來たのであつた。1677年には Dryden は *All for Love* に於て blank verse へと移つて行き，Otway も blank verse を採用したが，*Aureng-Zebe* に於ける此の基調の移動は明らかに blank verse への接近を意味して居る。prologue には，Rhyme に疲れたと云ふ表白の次に

Passion's too fierce to be in fetters bound.

とある。此の heroic couplet なる fetters をうちやぶるに至つたのはその passion が too fierce になつて來たと云ふのである。乃ち斯く詩形の變化は內容的な變化に促されたのであつた。それならば內容的に如何なる變化が起つたか，又，果してその fetters を打ちやぶつたものが云ふ所の passion であつたかが，次に問はれるのであるか。變化に目をうつす前に此の劇も heroic play である以上，前作の特徵をも引ついで居る事は指摘して置かねばならない。

4) *Conquest of Granada* に於て Almanzor は如何にえがかれたか。人に依つて

Honour's the only idol of his eyes;
The charms of beauty like a pest he flies;
And raised by valour from a birth unknown,
Acknowledges no power above his own.

(Part I. I. 1)

と評され，又

How much of virtue lies in one great soul,
Whose single force can multitude control;

(Part I. I. 1)

と嘆賞される Almanzor は，決して云はれる通りの人物ではなかつた。Abencerage 家と Zegry 家の爭鬪に割つて入つて以來の Almanzor の文字通り無敵の蠻勇は何か無骨な電氣人形を見て居る樣である。彼自らの

超人的な行動は彼自身の得意の雄辯で辯護し理窟づけて行くのであるが，此の artificial な impossible character は，Almahide への想ひが仲々遂げられないと，彼女の許にしのび込む暴擧を敢てする。

And what is honour, but a love well hid?

(Part II. IV. 3)

とか

These, madam, are the maxims of the day,
When honour's present, and when love's away,
The duty of poor human were too hard,
In arms all day, at night to mount the guard.
Let him, in pity, now to retire;
Let these soft hours be watched by warm desire.

等の馬鹿げた修辭が此所に放言される。白熱した dialogue の常として劇的誇張があるのは當然の事ではあるが，同時に此の甚だ virtuous hero らしからぬ言行の内に Almanzor の，笑ふべきであると共に，汚れた時代の psycho-ideology が暴露されて居るのである。Restoration のたゞれた風習が舞臺の上で愚弄され，或はそれをみせつける事に依つて觀衆に迎合されたのは，獨り喜劇の世界に於てのみでなかつた。Almanzor なる英雄は實は此う云ふ時代の思想を内に包みながらも結局は impossible character として概括されるのである。此の *Conquest of Granada* に於て一きは精彩を放つのは

There's no such thing as constancy you call,
Faith tis not heart; his inclination all.

(Part II. III. 3)

と放言する奸智にたけた妖婦 Lyndaraxa である事は當然である。

Almanzor の超人的な力と得意の rhodomontade を *Aureng-Zebe* に於て繼承して居るのは先づ Morat であらう。

War is to me a pastime, peace a pain (III. 1)

とか

Crimes let them pay, and punish as they please
What power makes mine, by power I mean to seize;
(III. 1)

とうそぶく Morat は此の劇の中で多くの舞臺を埋め，その活躍もめざましい。併し Morat はあくまで兄の modest virtue をうき立たす爲の副人物にしかすぎない。表面的にではあれ heroic play の themeに 掲げられたものは honour と virtue であつた。Almanzor は此の二つの德にこだはり，執着した超人であつた。併し Morat には此がない。彼は徹頭徹尾惡である。彼は Indamora に依つて正しくも "Yours is a soul irregularly great" と，きめつけられるが rhodomontade と力をうけついで居る點では Almanzor 的であらう。併し結局その劇の中に於ける位置は，*Conquest of Granada* に於ける Zulema あたりにしか相當しない。此の Morat を除いてはこの劇の中には馬鹿げた熱狂的なせりふは少いとは云へ，他にないのではない。五幕の終りに於て亂心の Nourmahal は

I burn, I more than burn; I am all fire.
See how my mouth and nostrils flame expire!
I'll not come near myself —
Now I'm a burning lake, it rolls and blows;
I'll rush, and pour it all upon my foes.
Pull, pull, that reverend piece of timber near;
Throw't on — 'tis dry — 'twill burn —
Ha, ha! how my old husband crackles there!
Keep him down, keep him down; turn him about
I know him, — he'll but whiz, and straight so out.
Fan me, you winds: What, not one breath of air?
I'll burn them all, and yet have flames to spare,
Quench me: Pour on whole rivers. 'Tis in vain:
Morat stands there to drive them back again
With those huge bellows in his hands, he blows
New fire into my head: My brain pan glows,
See! see! there's Aureng-Zebe too takes his part;
But he blows all his fire into my heart.

とわめき倒れる。

又「利己心は道德律の唯一の原動力である」と大膽に規定した Hobbes の思想は矢張り *Aurengs-Zebe* の中にも露呈されて居るのであつて，例へば virtue の權化 Indamora をとつてみても，心弱い Arimant が自分に想ひをよせて居るのをよい事にして，却つて Aureng-Zebe への文遣ひの使者に彼を使ふ此の heroine は modest であるには大分狡猾である。

Heaven made you love me for no other end,
But to beocme my confidant and friend: (III. 1)

と云ふ arbitrary な辯明は modest virtue の言葉とは思へない。

love を貫く爲には honour が危機に瀕する，此の矛盾の爲に Almanzor は「惱む」のであるが，その honour に對立する love とは非常に personal なものであつた。此又 *Aureng-Zebe* に於ても同じ事である。Dryden は Racine の *Mithridate* (1673) を讀んだものらしく，非常に兩者の plot なり人物の situation はよく似て居るのでであるが，併し *Mithridate* に扱はれた amour の波瀾は實は心理的なものであつた。單に肉慾的な amour が問題ならばあの悲劇は起らなかつたであらう。悲劇は王がすでに自分の者たるべくあきらめて居る Monime の心内に探りの石を投じた事に依つて，卽ち Monime の精神をも自分のものにせんとあがいた諸略の起す悲劇なのであつた。永遠に忘れ樣と深く心に秘し，決した Monime に，Mithridate は Xipharès と彼女と結んでやると云つて彼女を狂喜させる。併し折角此うして Monime の本心をつかんだ Mithridate も，今度は謀略と知つた Monime に依つて

「本心を申上げましたからには，此の言葉は必ず守らなければなりません」
(IV. 4)

なる宣言をうけて，此所で悲劇は結末へと急轉して行くのである。同じ嫉妬の old emperor や Morat には斯る探りの石は必要ではなかつた。判然と Aureng-Zede に向つて居る Indamora の love と知りつゝ "Tis is

her heart alone that you must reign: You'll her person difficult to gain" と云ふ皇帝の言葉があるのである。先に Almanzor に露呈された醜悪な時代心理は此所にも覗いて居る。

以上いくつかの例にみられる如く，前作に於ける selfish arbitrary moral 及び rhodomontade は決して消滅しては居ない。

5) 扨，今まで比較的語られる事の少なかつた肝心の主人公 Aureng-Zebe をみやう。彼は成程 hero たるべく，強く逞しい人物である。併し乍ら猪突的な Morat と反對に Arimant に依つて

> But Aureng-Zebe, by no strong passion swayed,
> Except his love, more temperate is, and weighed:
> This Atlas must our sinking state uphold;
> In council cool, but in performance bold:
> He seems their virtues in himself alone,
> And adds the gratest, of a loyal son;
> His father's cause upon his sword he wears,
> And with his arms, we hope, his fortune bears (I. 1)

と語られる，彼はもはや馬鹿げた bombast も吐かず，眞に noble end の爲にしかその勇武を振はない。父王も彼をば自分の rival に當るが故に遠ざけ様とはするが，內心彼こそが一番の loyal son たる事を知つて居り，Aureng-Zebe 自らは父の前には涙を流して孝順を誓ひ，誤れる義母を悟し，又非道の弟 Morat には條理をつくした訓戒を試みる。Almanzor は結局 impossible character であつたが，Aureng-Zebe はきはめておだやかに理想化されて來て居る。どこまでもうけいれてくれない父に去られた後での詠嘆

> How vain is virtue, which directs our ways
> Through certain danger to uncertain praise! (II. 1)

は半ば弱々しい一方に，底に冷え切つた巧利主義をみせては居るが

一體に獨白はしばしばその性格の中核を解く鍵を提供するものであるが，此所に英文學史上の purple passages の一に算へられて居る，彼の半ば

獨白的な言葉を紹介しやう。

When I consider life, 'tis all cheat;
Yet, fooled with hope, men favour the deceit,
Trust on, and think to-morrow will repay:
To-morrow's falser than the former day;
Lies worse, and, while it says, we shall be blest
With some new joys, cuts off what we possesst,
Strange cozenage! None would live past years again,
Yet all hope pleasure in what yet remain,
And, from the dregs of life, think to receive,
What the first sprightly running could not give,
I'm tired with waiting for this chemic gold,
Which fools us young, and beggars us when old.

(IV. 1)

父にはうけ入れられず，Indamora とは，はなされてしまひ，しかも Morat と云ふ背倫の弟が居る。獨り監禁の内に死期を待ちつつ内觀した結果 Aureng-Zebe のみた人生とはかくの如きものであつた。みだれにみだれた我王家に積極的に秩序を恢復さすには，彼は餘りに孝順の子であつた。「人生とは——」と云ふ内省は Almanzor にはなかつたものであつた。まして彼にとつて此の世は欺瞞ではない。それは彼等の意のまゝに動き，動くべき世界にしかすぎなかつた。

Strange cozenage! と云ふ叫びは手のつけられぬ環境の重壓の下にある弱者の言葉なのである。

Aureng-Zebe は結局自分及び Indamora に對立する諸勢力の解消の中にめでたく結ばれる。そして老王，Morat 及び Nourmahal はそれぞれ二人への對立勢力となるのである。そして此所で注意すべきは此の劇を引きづつて行く者は Aureng-Zebe ではなしに，逆に三人の對立者であつた事である。勿論，如何なる劇と雖も對立者の勢力弱くして決して劇的緊張なるものは生じて來ないのである。併し此所で再び *Conquest of Granada* をみやう。Almanzor に對する對立勢力(Boabdelin, Zulema, Lyndaraxa

etc) も決して弱きものではなく，それぞれに plot の上に花々しい活動をするのであるが，然も此の劇の展開は此等の對立勢力を強引に粉碎して行く Almanzor の超人的 gest に依つてぐんぐん押しすゝめられて行く。緊張した對立關係にあり乍ら，それを lead して行くのが Almanzor であつた。然るに Aureng-Zebe のあり方は消極的である。plot の展開は全て Aureng-Zebe を媒介にしながらも，却つて上記三つの對立勢力相互間の更なる對立爭鬪の上に展開して行くのである。Aureng-Zebe は此の爭鬪の中に modest な一筋の糸となつて劇を縫つて行く。Montezuma から Almanzor へと系列を引く最高主權者若くは抑壓を知らぬ野人，に對して Aureng-Zebe は *Conquest of Granada* に於ける Ozmyn, *Marriage a la Mode* に於ける Leonidas と云ふ如き王子若くは族長の御曹子等の，位階は低くはなくとも，最高主權者でもない人々の系列を引いて，しかもはじめて此の劇の中に主役となつて登場するのである。

Almanzor も架空の虹であり乍ら，やはり一つの現實の反映であつた。そして實に Aureng-Zebe も，彼なりに，別の psycho-ideology を反映して居るのである。前者は heroic virtue の權化として，後者は普通人の virtue への接近を示しつゝ。

6) 在來の heroic play は大體に於いて表面的にはその words こそ moral であつたが，plot なり，劇の基調なりは結局 immoral に墮して居た。此に反し，*Aurenge-Zebe* にはまじめな風俗改善の意圖が濃い。そして此う云ふ身近な現實的意圖を持つた劇は當然 natural であつた。

> I to a son's and lover's praise aspire,
> And must fulfil the parts both require. (I. 1)

Aureng-Zebe の性格の源は此所にうかがふ事が出來る。Aureng-Zebe が最高主權者としてではなく，一家の子として出現した事，しかもその地位に於て始めて主役となつて登場した事は意味が深い。何故に Dryden は斯る人物を主人公としたか。少くとも結果に於ては此の爲に，劇は在來の

heroic play よりはずつと自然味をおびて來た。しかも Aureng-Zebe の性格が王家の子としてうなづけると云ふのではなしに，平民と云ふ成員を加えた觀衆に極めて身近な性格となつて來た事に於て。父の不信に對する complaining, Indamora に對する再度にわたる女性的嫉妬，それにあの life's passage は必ずしも王家の英雄的な子としては必要なのではなかつた。Aureng-Zebe の心理には觀衆の心理が多く參與して居る。形式的に rhyme をはなれて行かうとした事は，內容的に自然に近づかうとした事であつた。

heroine Indamora は亂鬪の內に Aureng-Zebe は死んでしまつたと思ひこむか，しかもすぐさま Aureng-Zebe に殉じやうとはしない。追ひまわす Nourmahel より必死となつて逃げる。後で嫉妬の Aureng-Zebe に此の事をなじられた時に彼女のこたへた言葉はこうである。

"Not that I valued life, but feared to die:
Think that my weakness, not inconstancy." (V. 1)

此所にあるのは極度に理想化された Almahide とは異り，充分に弱さをそなへた一人の女である。此は Dryden 自身の明らかに意圖した性格であつた。彼は dedication に於て斯う說明して居る。

「Indamora と Melesinda の件りは自然であると思はれ，又それぞれの性格にふさはしきものと思はれます。……詐つて舞臺を飾るよりは彼女等の行ひの內に實生活に卽したよりよき美德の鑑を見出す事は，吾が國の名譽の爲にもうれしい事であります。有體に申上げますれば私は唯人性の弱さと不完全さをまじへた實際の美德をえがき出したのであります。私は此の劇の女主人公に死をおそれさせました。……」

以つて Dryden の創作態度をうかがふ事が出來るであらう。

hero. heroine にしてかくの如くである。しかも，此の劇の內には所謂 domestic scene が多くある。

"Such virtue is the plague of human life;
A virtuous woman, but a cursed wife,
In vain of pompous chastityye are proud;

Virtues adultery of the tongue, when loud." (II. 1)

なることばは王の Nourmahal に對する皮肉のみではなしに，實は以前の heroic play にみちみちて居る形式的な virtue 談義に對する一の批評であり，つづいて王の語る

What can be sweeter than our native home?
Thither for ease and soft repose are come;
Home is the sacred refuge of our life;
Secured from all approaches, but a wife.

なる言葉と共に，明らかに觀衆心理の變遷に對應して居る。

此につづいて書かれた *All for Love* は 1818 年まで上演されたと云ふ花々しい上演史を持ち，Shakespeare の *Antony and Cleopatra* と此とを比較して，後者を勝れれりとする評家も決して少くはない。*All for Love* はまことに均勢のとれた美しさを持つて居る。併し乍ら *All for Love* に於ける Antny と Cleopatra はもはや，世界の半ばを舞臺とするあの雄大な構想の内に中年の情熱的な戀を展開した the triple pillar of the world と serpent of Nile ではない。すでに情熱のはげしさ深さが此の劇の主題なのではない。武將ではなく，女王ではなく，二人の中年の男女の淋しい戀の末路がえがかれて居る。しかも劇的興味は此の主人公二人よりは，此の二人の背後にある Ventidius と Alexas の抗爭にかかつて居るとも見る事が出來る。子供までも引き出して來て Cleopatra と貞女 Octavia とを對面させた Dryden は此所でも又 Antony と Cleopatra を觀衆と同列に引きさげてしまつたのである。勿論の事 Shakespeare の劇はその餘りに奔放な構成の故に Elizabethan stage に於てさへ上演の難しいものであつたのであらう。にも拘らず此の劇は單なる reading virtue 以上のものを持つて居る。それに對して，Dryden の劇の持つ花々しい上演史も，實はその後一路衰退して行く劇場の中に打ちたてられたものである事を知らねばならない。*Aureng-Zebe* から *All for Love* へ，此所でも Dryden は age of Dryden に於ける詩劇衰退過程の里程標を自ら立てゝ行つたの

である。

7) 1694年に出た Southern の *The Fatal Marriage* は漸くに次代の sentimental drama の形をとゝのへるに至つた作として注目すべきである。1675年に書かれた *Aureng-Zebe* の中にある sentimentalism を誇大に述べる事は不當であらう。

17世紀初頭にもあつた domestic tragedy は王政復古期の sentimentalism 禁壓に會つて，しばらくは花をさかせないが，我々は漸く1680年代にはつきりと次代への過渡期の形相をみる事が出來る。そしてそれが，blank verse 復興と稍時を同じくして居るのも興味ある事である。Charles II 時代を宮廷中心に一方的に解釋する事は不當であらう。宮廷演劇としての初期の Restoration drama は市井にある serious な reflective な人々からは遠ざかつて居た。此の「淫蕩」の時代にも拘らず，說教集の賣行は前例のないものでああつた。Charles II から James II へ，やがて revolution へと移行するに從つて bourgeois と貴族との位置交代と共に時代は徐々に reiflective cast を帶びて來てやがてはそれが sentimentalism の地盤となつたのであるが，すでに此の serious reflection は最初から底流として，若くは一勢力として存在して居たものであつた。そして此の時代の pastoral play と云ひ heroic play と云ひ，romantic play と云ひ，何れもそれ自體が姿こそ違へ，moralization の傾向は一般的でもあつた。書族達は漸くその劇に對する「嗜好」をかへて行く。prologue に於ける Dryden の Rhyme に「疲れた」と云ふ表白は Dryden 自身の倦怠を表はすと同時に，今云つた樣な動きの微妙な反映かとも思はれるのである。

（註） *Spectator*, 1712年3月11日 (No. 323) の項に有閑日記を書き送つて來た倦怠の lady は退くつしのぎに此の *Aureng-Zebe* をよみ，夜には人が自分の足下に跪づいて自分を Indamora と呼んでくれた，と云ふ夢をみて居る。そして又つづいて，彼女の opera 見物の友 Kitty は月曜の朝方に彼女を起しに來て，此の劇のあの有名な life's passage 八行を本をみずにくりかへしてみせ

たと云ふ事である。此の劇が如何に次代の人々の中に深く入り込んで居たかと云ふ事の證左ともならう。その上演は，*Conquest of Granada* の1709年までであつたのに對して，1721年までつづけられたと云ふ事である。

次號『主流』原稿募集

◎英語英文學を主とする研究論文・記事を内容とするもの

◎原稿は全て横書・歐文活字使用差支なし

◎紙數制限なし

◎次號締切は九月末日